

## 群衆

岡本 俊弥

日本空飛ぶ円盤協会をご存じだろうか。最古のSF同人誌「宇宙塵」ができるさらに前、円盤がまだUFOとも呼ばれず、オカルト的な胡散臭さもなかったころに作られたアマチュアの団体だ。三島由紀夫や黛敏郎も入会していた。洒落ではない。その存在を、なかば信じてもいたのだろう。時代のカッティングエッジなのだった。

古い会合写真が残っている。キャプションが付けられており、主催者だった荒井欣一と星新一の顔までは分かる。しかし、他の十名あまりが誰なのかは分からない。六十年以上前の写真だ。プライベートだというのに、全員ネクタイを締めスーツで決めている。場所は料亭だろうか。記念写真を撮るくらいだから、オフィシャルな会合だったのかもしれない。そこに、あの男も写っている。右奥、襖の陰に隠れ、顔だけが見えている。

服装はだからよく見えない。白っぽいスーツのようだ。丁寧に分けられた髪、やや斜めを向いていて、目だけはカメラを見つめている。笑ってはいない。当時の記念写真では、笑顔を見せない人が多い。特別な意味はないのだろう。

SFの黎明期に興味があつて、いくつかの文献を読み漁っていた頃のことだった。今日泊亜蘭の評伝や、宮田昇の書いた戦後翻訳の逸話、柴野拓実からの聞き書きなど、不十分かもしれないが、その時代の文献はあることはあつた。当時の記録は、ネットでは十分調べることができない。とはいえ、資料をいくら読んでもリアルに分かることは少ない。関係者の多くは故人だ。別に研究でもないのだから、メモを取るでもなく、眺めていたといった方が良いかもしれない。意外に写真の収録は少なく、だから、彼らに気がついたのは、ずいぶん後だったように思う。

半世紀前、第一回日本SF大会は目黒で開催された。参加者は一八〇人といわれるが、記念写真に写っているのはその半分くらいだろう。一番右側の最後尾、壁の色が変わって見えるあたりに立っている。二人いる。この大会は、後に恒例となった夏ではなく、五月の一日だけの日程で開かれた。空調のない部屋で、多くの人はスーツを着ている。何人かは詰め襟の学生服だ。二人はスーツかジャケットを着ている。ネクタイはしていない。

彼らは何をしていたのか。

そのことを初めて考えたとき、真つ先に思った疑問だ。そう、目的は不明、存在したことしか分からない。

ただ、正体不明なだけなら、他の人々も同じだ。

名を残す者は少数しかいない。当時の記憶がなくなると、何の記録もない。他の人々”は、文字通り消え去ってしまう。しかし、本や雑誌やコンベンションのような人手集約型のイベントならば、歴史を作った功績は、名もなき人にある。実務は彼らがやったのだから。文字数をチェックし、レイアウトを決め、文字を手書したかもしれない。机を並べ、椅子を運び、受付をしたかもしれない。その日の主役だったろう。ただ、現場を仕切ったリーダーでも、名前が残らなければ、結局名もなき人だ。つまり、群衆になる。

過去の集合写真を見るのが習慣になった。見知らぬ顔、さまざまな出で立ち、名前も定かでない人たち。

だが、そうではない彼らがいる。名前がないのに、どこにでも存在する。何をしているのか。

一見では分からない。服装は毎回異なる。髪型が違うこともある。けれど一度気がついてしまえば、明らかに同一人物に見える。だが、これだけ同じ人物が参加しているのなら、どこかに記録が残るはずだ。一人ではない。三人か四人か五人か、似ているが複数のように思える。

一九七〇年の第一回国際SFシンポジウムの写真がある。アメリカヤソ連の作家と日本の作家を集めたプロの催しだったが、小松左京ら作家の他、鏡明ら当時の多くのファンも協力した。限られた参加者しかない大会だった。その、記念パーティーの写真にも彼らがいる。複数のテーブル席があり、ゲストが見える奥、スーツを着て最後列に並ぶ何人かだ。間違いない。

三十年以上前の北海道のバンガローの前。暑苦しい京都の夏の閉会式後。神戸の広いホールの前に並ぶ人の中。石川の温泉旅館の玄関前。大阪の古い厚生年金会館のエントランスにある階段、東京にあるホールの前、芦ノ湖畔にある合宿ホテルの中、さまざまな時代の集合写真。どこかに彼らはいらる。明瞭な写真は次第に少なくなり、ピントがぼけた写真になっていく。写真自体が、誰でも撮れるカジュアルなスナップに変わっていくからだ。二十一世紀の島根、栃木、岐阜、静岡、時代が下れば、解像度がまちまちで、構図もでたらめなデジタル写真をネットの上で見つけることができる。初期の携帯カメラのレンズでは、識別が至難

だ。それでも過去のほうが見つけやすい。どこかに必ず写っている。

いつも同じ顔をしている。年老いては見えない。

そんなはずはないのだ、半世紀を超えている。始まりが二十歳としても七十歳を優に過ぎている。写真の見かけでは、何歳だったのか何とも言えない。三十歳とも四十歳とも見える。

スタツフだったのなら、名簿がありそうに思えるが、そこに書かれた全員を覚えていて関係者はいないだろう。だからこそ彼らは群衆なのだ。存在はしても痕跡を残さない。誰とも区別がつかないから、見分けられない。

ホラーなら不死者、SFなら時間旅行者とするほうがむしろ簡単だ。よく似ているように見えるけれど、そもそも写真だけで証拠にはならない。考えてもそこに行きつく。その通り、実在を確かめるのだ。

彼らを目撃しなければならぬ。

もう秋口になっていた。選択できる会合は多くない。地方で開催される大学主催のセミナーを選んだ。コンベンションにはよく参加してきた。主催者に回ったこともある。それも、ずいぶん昔のことだ。もう知り合いもない。一日だけのセミナーなら問題ないだろう。第一、今回は参加が目的ではない。

広めの会議室に百人くらいの参加者を集めて集会は始まる。パネルディスカッション形式で、数名のゲストが前に並び、テーマに沿った発言をする。話題の作家や評論家の話といっても、少人数のローカルな催しにベストセラー作家は来ない。オフィシャルというより、アンダーグラウンドな発言が多い。それだけ、原初なSFの集まりに近いものだった。

年齢層は、思ったより幅広い。二十歳前後の学生が多いが、主催者関係なのだろう。五十を優に過ぎた中年、白髪の年配者もいる。しかし、写真で見た覚えのある顔とは違う。どこにでも現れるわけではないのか。

ディスカッションの内容が、断片的に耳に入ってくる。

「量子物理学では、互いに相関を持つ二つの粒子は、どれだけ離れていても、同じふるまいをする。距離や、時間が離れている粒子が、お互い結びついている」「時間も、ということは、時間を超える？」

「量子の状態だけど、超えるというか時空を問わず共有している。たとえば、量子もつれの関係にある一方を測定すると、ペア側の状態も同時に確定する」

「だから、そういう意味で時間を超越している。過去と未来で同じ情報が共有で

きるわけだ。過去が確定すれば、未来も確定する。その逆もある」

「ただ、あくまで情報だけだね」

その瞬間に違和感を感じる。  
いる。

最後尾、何人か立っている参加者の中に、その顔がある。無表情だ。黒いポロシャツを着た姿は、他の参加者と紛れてしまう。年齢は、四十歳くらいに見える。いや、五十歳、六十歳か。黙ったまま議論を聞いている。目を離すと、見失いそうなくらい存在感がない。やがて会合が終わると、出口に向かう参加者に隠れてしまう。後を追う。どこかで捕まえてはいけない。

階段を降り、エントランスを抜け、駅と反対方向に向かう。ゆっくりとした足取りで小路に入っていく。人通りがなくなる。

思わず声をかける。意外にも、「彼」は立ち止りこちらに目を向ける。

奇妙なことが起こった。

一人だけのはずが、そこには群衆がいた。さまざまな人がいた。若い男がいた。丁寧に分けた古風な髪形をしていた。太った男がいた。着古したシャツをだらしなく着ていた。眼鏡をかけにこやかに笑う初老の男がいた。優しげなまなざしの銀髪の女がいた。ひよろりと立つ痩せた男がいた。ぶかぶかの服を着た老人がいた。髪が薄くなった、いや肩まで伸ばした男が、女がいた。それは複数の誰かを、同時に見ているようだった。

つぎの瞬間、そこには誰もいない一人がいた。そして誰ひとりいなくなつた。

レイ・ブラッドベリの短編に「群衆」という作品がある。交通事故の現場に必ず現れ、事故の負傷者の「手助け」をする人々の話だ。どこからともなく集まり、怪我人を無理矢理でも動かして、死を早めようとする。その事実を知った主人公も、「助け」を受けて葬られる。無名の群衆たちは、最後まで匿名の存在でなければならぬからだ。群衆には目的がある。彼らは死を誘う使者なのだ。死すべきものを速やかに死に導く。だとすると、写真が捉え、この目で見た群衆も、何らかの意図を持つと考えるべきだろう。意味もなく存在を明らかにするはずがない。

カタカナで書いたクラウドとは、「群衆」であると同時に「雲」でもある。彼らは、地上から蒸発した記憶の集まる雲なのではないか。忘れられた人々の記憶が雲になる。そして、失われた記憶の代替物として雨のように降り注ぎ、実在した存在と置き換わっていく。過去のどこかで、ある人に関する記憶が失われると、

彼らという存在の起点が生じる。そこから未来、あるいは過去に向かって、彼らの実存を伝える情報が伝播していく。あらゆるSFの会合に、存在が書き込まれていく。人々の記憶から失われた、すべての人々の代わりに。ホワイトノイズのような、何者でもないものとして。思い出は消えていく。消失と比例して、彼らはつぎつぎと増えていく。まず過去の喪われた人々と置き換わる。忘れられた人が増えれば増えるほど存在感を増す。ここだけではあるまい。あらゆる事象を担当するそれぞれの群衆がいて、彼らも、未来に向かって拡大し続けているのだ。

だが、それでは現在にも彼らが現れた理由が説明できない。今存在するものに、無名のものがあるとでもいうのだろうか。

改めて写真を見る。

無表情な顔、いつも写真で見かける顔、見慣れた顔。ふと気が付く。

そこに映っている顔は、自分とよく似ている。